



八尾市市民後見人 活動記録集



支えるという役割

B さま

平成29年度バンク登録【第3期生】

受任期間：平成30年7月～令和2年10月

「市民後見人」活動記録

B 著

1. 市民後見人養成講座の受講の動機

市民後見人養成講座にて社会福祉協議会(以下：社協)の紹介があり、社協の設立背景・趣旨等の説明があった。

社協の活動は多岐にわたるがその中でも所員の方が熱っぽく語る「認知症高齢者・知的障がい者等が安心して地域生活を送ること。その生活を見守り、財産を管理する市民後見人」に興味を持った。

以前より自分ができる地域貢献を探しており、市民後見人養成講座に申し込んだ。養成講座は、およそ半年間。

座学・グループ討論と介護施設での実習を行う。実習にて障がい者と対峙した時、感じたことは「この子らどないかしたらんとアカン」という意識だった。

2. 本人の概要(居所・状態)

本人は、グループホームに、3年前から入居しており、80代女性で、アルツハイマー型認知症、要介護4。医師の所見としては、自分の年齢は、言え理解力・計算力は、困難であり、見当識(日時・場所・近親者の識別不可)障がいがあり、回復の見込みが乏しいとのこと。

性格は、明るく足腰は丈夫だが、身体を触られるのが大嫌いなので、入浴時&おむつ交換が嫌がってしまう、と職員より。でも、終わるとニコニコ。

普段は、ホームのリビングで静かに独り歌。

3. 活動の内容

(1) 具体的な市民後見人活動

財産管理としては、施設利用料・消耗品等支払い、年金等の入金管理。

訪問は、毎週一回、約一時間(14時～15時)の訪問、面談場所はリビングです。歌うことが好きなので、よく歌ってくれます。曲は、童謡唱歌、例えば赤い靴・夕焼け小焼けに、なぜか夫婦春秋。

歌詞はいい加減で「いつも作詞してる！」

また、10人兄弟の全員の名前を呼び続けます(3度4度)。凄いのは、兄弟の名前や生まれ故郷の住所を漢字で書ける。アルファベットA～Zまで

完璧に書ける・言える。

毎回、凄いね！と言うと「馬鹿にセントイテヤ！」

たまに一緒にお散歩(施設の廊下を3・4往復)します。本人さん、腕を組むのが大好きで、この時ばかりはニコニコ。不機嫌な時、「私はもうイラン人間、何時死んでもエエねん」と落ち込むが、そのきっかけは自分の意思が通らなかったとき、と分かってきた。

一緒に何かしよう(何かしなくては)として、塗り絵(簡単な(幼児用)塗り絵)であそぼうとした。タブレットで時節の写真・歌の風景を見せ一緒に遊ぼうとしたが、彼女の意に添わず席を立たれることがしばしばあった。

一緒に遊ぶのは難しい、他の方策を探しているときに施設長から、子どもが来たと報告を受けました。

(2) 子どもが施設へ訪問された。

施設長に「子どもは、どんなことをした？」「子どもは、何の話をしていた？」

「子どもは、どれ位いた？」「本人に変化は？」と矢継ぎ早に質問。

施設長は「な～んも、せえへんかった(喋ってないよ)」

「二人、部屋の隅でちょこんと座っていただけ」「子どもと半時間ほど座って「す～
～と帰っていった」(挨拶なし) 私「本人に変化は？」

施設長「変化はな～んもない」「子どもと逢っていたこと覚えていない様子」
これを聞いてから、道具をもって遊ぶより、ただ横に座っているだけで良いのか！
と思うようになり気が楽になりました。

その後の接し方は、横に座って歌や話を聞き一緒に廊下を歩いています。

訪問のたびに、職員さんに日々の様子や夜中のトイレを確認し、できるだけ
施設の行事(運営推進会議・避難訓練や催事)に参加することを心がけまし
た。ドックセラピーは人気があったと聞きます。

(3) ケガからその後。お亡くなりになるまで。

リビングでつまずき転倒、「大腿骨頸部骨折」をされた。入院・手術・リハビリするも完治せず、徐々に食事の量が落ちていった。病院から、重篤と連絡が入り、夜半、亡くなられた、とのこと。

コロナ禍での入院生活、6月からは病院が全面面会禁止となり、本人の様子は看護師長から毎週聞くことが出来ましたが、本人の顔を見られない、声が聞けない、手も握れなかったことは悔しい思いです(ビデオ通話もできず)また、遺影を用意できなかったのが気になっていました。

後日、ホームにお願いして本人の元気な時の写真を沢山分けもらい、「思い出の写真集」を作り、子どもへ手渡しました。

市民後見人としては、葬儀社への連絡、清算、斎場へ同行。家裁への連絡書作成・送付、市役所生活福祉課、年金事務所へ報告、社協から親族へ連絡を取ってもらいました。

最後に、八尾市・八尾市社協の職員も立ち合いのもと、子どもへも遺品引き渡しを行い、家庭裁判所へ各種書類送付、法務局へ終了登記提出しました。

(4) 市民後見人活動を終えて

要支援者がおれば、自分のできる範囲でお世話をすること。

高齢者の認知症の方々との付き合いは「 = 共生 = 」と思っています。

認知症は進行しても改善することはありません。

また、人は必ず亡くなります。

本人が亡くなれば、送りだすお手伝いが後見人の最後の仕事です。

市民後見人は、本人と一対一の関係です。

お世話するうえで困ったことが起きれば、社協・施設の方々・ケアマネや、ケースワーカーの人たちが何時でも何処でもサポートしてくれます。

また法律的な問題があれば、専門家が相談に乗ってくれます。

こんな世界を知ったこと、こんな社会と繋がったことは自分の自慢です。

私は年齢的に次の方をお世話できませんが、自分の周りの方々に

「こんな仕事(市民後見人)があるヨ。やってみない？」の声かけを

今後も続けていきたいと願っています。

追記：本人さん最後まで私の名前を覚えてくれなかった（残念）



社協職員よりひとこと

お仕事をされている中での、市民後見人活動ありがとうございました。
毎月、お話しを聞かせていただくのを、
実はこちらが楽しみにしておりました。
これからも、市民後見人活動PRもどうぞよろしくお願いいたします。

